

# 月刊 コンペイトウの森通信

愛知県森林公園の“しぜん”を伝える

# 150

2021.11.12(晴)

67名

## 自然ウォッチングの記録

- 鳥 シジュウカラ、メジロ、エナガ、コケラ、ヤマガラ、ヒョドリ、コジュケイ、イカル、ウグイス、モズ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ハシブトガラス、ハシホソガラス
- 花 サザンカ、チャ、シロダモ、ヤツテ、ノコンギク、キッコウハグマ、キセルアザミ、ウメバチソウ、ホソハリンドウ、ミカキグサ、フユノハナワラビ
- 昆虫 ヒメアカテハ、ウラギンシジミ、アキアカネ、ヒメアカネ、リスアカネ、オオアイトトンボ、コハネイナゴ、ショウリヨウバッタモドキ、オオスズメバチ、キゴシハナアブ、ツマゲロキンバエ、オオカマキリ
- 他 ジョロウグモ、ヤマカガシ、カナヘビ



シロダモ

## ウォッチングの中から

朝方降っていた雨も上がり、快晴となりました。こどもの森では羽化して間もないオオスズメバチの新女王が見られました。普段見る働きバチに比べてずっと大きく、プラケースに入れても恐ろしさ満点です。



ウラギンシジミ

シロダモは今回初めて雄株の花が見られました。花の少ない時季なのでより楽しめました。

ウラギンシジミはソヨゴの葉裏でじっとしていました。成虫越冬なのでもう休眠したのでしょうか。チョウの銀色の翅は葉の照りに紛れて優れたカモフラージュになるので、いつもは簡単に見つけることはできません。



サネカズラ

## なるほど植物園

### ツタの葉

以前、「単身複葉」という植物用語に関連して、ツタに少しだけ触れたことがあります(No.6. 132)。今回はそのツタの葉にスポットライトを当ててみましょう。



葉の進化の流れは、複葉から単葉へ向かった、という



「単葉進化説」を少数派かもしれませんが我がコン森(No.131. 132)は支持しています。その根拠の一つは、ツタの若い株からは複葉(三出複葉)が出るのに、成木となった株から出る葉は大きな単葉となっていることです。これはツタが成長の過程で「複葉から単葉へ」の進化の流れをたどっている、とも考えられるのです。

そして、見た目は単葉となったツタの葉も複葉の性質を強く残しています。秋の落葉はまず紅葉した葉面だけが葉柄から離れ落ち、その後葉柄が落ちる二段階となっているのです。これは複葉の多くが持っている、葉軸から小葉だけを先に落葉させる仕組みの名残りで「単身複葉」と呼ばれるものです。



サクラなど一般的な単葉は、葉面と葉柄が一体で分離することはありません。仮にツタが単葉から複葉へ進化しつつあるとするならば、ツタは複葉の分離する性質を「先読み」して獲得し、その後葉に切れ込みを入れていったこととなります。進化の順序としてそれは不自然であり、やはりツタは単葉化の途上と考えるのが自然なのです。(高谷)

この情報紙のメール配信(無料)ご希望の方は、愛知県森林公園の公式サイトを開き、【コンペイトウの森通信】のバナーからお申し込みください。

発行 2021.11.13  
愛知県森林公園指定管理者  
㈱ウッドフレンズ 0561-53-1551

「自然ウォッチング」は毎月第2(金)10:00~12:00 展示館前集合 植物園入園料が必要です  
「コンペイトウの森通信」の名称は、シラタマホシクサの別名コンペイトウグサから考案しました